

史料紹介

『看聞日記』現代語訳（二七）

菌部 寿樹

本稿は、室町時代の皇族・伏見宮貞成（一三七一～一四五六）の日記『看聞日記』を現代語訳したものである。本稿の底本は、小森正明氏代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』三（明治書院、二〇〇六年）である。難しい語などには※の印を付け、その条の末尾に註を付けた。また、日記底本には改行がないが、訳文は内容に応じて適宜改行した。なお、敬語についてはやや不自然な表現があるが、当時の伏見宮貞成の微妙な立場を勘案した結果である。

○現代語訳（一）～（二四） 応永二三年～三〇年（一四一六～二三）『米沢史学』三〇～三七号・『山形県立米沢女子短期大学紀要』五〇～五七号・山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告』四二～四九号（二〇一四～二〇二二年）

○現代語訳（二五） 応永三一年一月一日から四月二九日『米沢史学』三八号（二〇二二年）

○現代語訳（二六） 応永三一年五月一日から八月三〇日『紀要』五八号（二〇二二年）

本稿で訳出したのは、紙幅の都合上、応永三一年九月一日から一二月三〇日までの分である。『看聞日記』を現代語訳した経緯などについては、（一）を参照されたい。

本稿により、『看聞日記』の面白さを少しでも多くの方に知っていただき、さらに底本に当たってもらうことができれば、本望、これにすぐるものは

ない。皆様からのご示教・ご叱正を切に望む。

【主要参考文献】

横井清『室町時代の一皇族の生涯』（講談社学術文庫、二〇〇二年、初出一九七九年）

位藤邦生『伏見宮貞成の文学』（清文堂、一九九一年）

小森正明代表校訂『図書寮叢刊 看聞日記』一～七・別冊（明治書院、二〇〇二～二〇一四・二〇二二年）

村井章介「綾小路信俊の亡霊をみた―『看聞日記』人名表記法考―」（同

『中世史料との対話』、吉川弘文館、二〇一四年、初出二〇〇三・二〇一四年）

同「『看聞日記』の舞楽記事を読む」（『文学部論叢』一三八号、二〇一五年）

同「『看聞日記』人名考証三題」（『日本歴史』八八二号、二〇二一年）

同「『看聞日記』の引用表現について」（『古文書研究』九二号、二〇二二年）

松岡心平編『看聞日記と中世文化』（森話社、二〇〇九年）

植田真平・大澤泉「伏見宮貞成親王の周辺―『看聞日記』人名比定の再検討―」（『書陵部紀要』六六号、二〇一四年）

植田真平「伏見の侍―『看聞日記』人名小考―」（『書陵部紀要』七〇号、二〇一九年）

田代博志「山城国伏見荘における沙汰人層の存在形態と役割」（『中近世の

領主支配と民間社会」、熊本出版文化会館、二〇一四年）  
松蘭齋『中世禁裏女房の研究』（思文閣出版、二〇一八年）

九月一日、晴。いつものように月始めのお祝いをした。御香宮の祭礼を拝見し、相撲も秘かに見物した。田向前参議・重有・長資ら朝臣・慶寿丸・梵祐を連れて行った。他郷の人たちも来ていて、数十番の相撲となった。西方が打ち止めの優勝となった。優勝したのは地元・伏見荘の村人である。

#### 庭田家の南面の垣根は田向家と接している

二日、晴。庭田家の南面の垣根は、数年来、庭田家のものである。この垣根は、田向家との境となっている。ところが田向家がこれは我が家の垣根だと言いつつ出した。ところが庭田家が長年管理しているので垣根を修理しようとしたところ、田向家が腹を立て、田向長資朝臣以下侍たちが来てその垣根を壊してしまった。

田向家の行為は行き過ぎており、とてもひどいものだ。こんなことをすれば、武家であればたちまち命を落とすことだろう。しかし公家の情けない領主としては、どうしようもできない。

#### 庭田家と田向家が絶交状態になる

それで田向家と庭田家は絶交してしまった。庭田重有朝臣の方に道理があるのはもちろんである。仲違いした上は、歎いてもしかたがないことだ。この件について重有朝臣が特に力をこめて主張している。思いがけなく変な振る舞いだ。

三日、晴。岡殿に行っていた廊御方が今日お帰りになると連絡してきた。廊御方はまず岡殿から入江殿へ行き、娘の入江殿御稚児を連れて宮家へお戻りになるといので、こちらからも迎えの者を派遣した。

#### 娘である入江殿御喝食の法名は性恵

夕方、娘たちは戻ってきた。娘のお稚児姿は立派だった。法名は性恵

となったそう。娘からお土産として酒樽などをもらった。無事寺入りして、めでたいことであり、うれしかった。

祝宴には田向前参議らも参加した。岡殿での姪の様子を話してくれた。母の上臈局もこれでご安心のことであろう。これもめでたいことである。

四日、晴。正親町三条公雅大納言から書状が届いた。宮家の領地回復の訴えを重ねて上皇様にお伺いしたところ、以下のようなお返事だった。うだ。「訴えの書状を拝見しました。この訴えをなおざりにはしません」などと、上皇様はいろいろお話し下さったそう。

また伏見荘の現地管理者のことについても上皇様からお話があった。この件についてもなおざりにしないとのことだった。まずは恐れ多くもうれしいことである。

#### 『大学』

また正親町三条から古代中国の思想書である『大学』を貸してほしいという申し出があったので、大事にしている『大学』一巻を貸し与えた。

#### 田向家の新しい垣根

さて庭田家の垣根をめぐって争っている最中に、庭田家はその垣根を完全に撤去してしまった。もともと父・大通院が田向・庭田両家へ敷地をお下しになった書類がある。その記載に基づいて両家敷地の境界線を決めたのである。小川禅啓が両家の間を取り持って調停に当たっている。私が庭田家に行ってみてみた。以前の垣根の跡よりも少し東側に寄せて新しく垣根が建てられていた。今後はこれを田向家の垣根と定めたそう。ただ両家が絶交していることに、いまだ変わりはない。

五日、晴。勧修寺経興中納言が書状で報告してきた。この書状で播磨国国衙領（※）の御年貢をしっかりと取り立てますと言ってきた。この年貢の収納については、月ごとの収取怠慢がひどすぎるので、この前、厳しく命じたところ、ただいまこのような返事が返ってきた次第である。

この前、上皇様へ宮家の窮乏状況をお伝えしたばかりだ。それで上皇様が宮家をなおざりにはしないと仰つてくださった。その御意を受けて、勧修寺はこのように報告してきたのであろうか。いずれにせよ、まずは厳しく取り立てますと報告があったのはめでたいことである。

上皇御所で、ご祈祷が行われたそうだ。導師は如意寺准后だそうだ。動行したのは不動法だという。

※国衙領（こくがりよう）…各国の国府の所領。公領ともいう。室町時代の国衙領は、既に国府が衰退しているの、荘園と同じような私領になつてゐる。播磨国（兵庫県）の国衙領は、伏見宮家の領地。

六日、晴れていたが、夜に雨が降つた。惣得庵の宗庵が酒一樽を持参して来た。入江殿御稚児にお会いするために来たという。それで酒を飲んだ。

田向前参議以下もこの酒宴に参加した。

八日、晴。風呂に入った。御香宮御旅所に行った。息子・入江殿御稚児・娘・宮家の女性たちを連れて行つた。

ところで今日、泉涌寺で仏法の講演があつた。上皇御所から雅楽の演奏者たちに泉涌寺へ来るよう、ご命令があつたという。それで綾小路信俊前参議も泉涌寺へ行つたそうだ。

九日、晴。御香宮の祭礼を見物するため、田向家へ行つた。その前にまず、いつものように重陽の御節供でお供えをした。そして一献の酒宴をした後、田向家へ行つた。

息子・入江殿御稚児・娘たち・東御方・廊御方・亡き兄の妻であつた上臈・妻の二条殿・今参らをして連れて行つた。田向家と絶交している庭田重有朝臣は来なかつた。しかし慶寿丸は来た。世尊寺行豊朝臣も来た。

### 今年の御香宮祭礼頭人は三木善国

まず一献の酒宴が開かれた。その後、いつものように祭礼のお囃子行列が練り歩いてきた。祭礼当番は三木善国である。行列が立ち去つてから、また一献の酒宴をした。蔭蔵主松崖も途中からやつて来た。夕方に

なつて宮家へ帰つた。とても深く酔つてしまつた。

いつものように山田宮の猿楽が行われた。入江殿御稚児・東御方・宮家の男どもは猿楽を見物しに行つた。

### 御香宮神事相撲に京都周辺や近郷の者たちが大勢集まつた

御香宮では相撲があり、京都周辺や近郷の者たちが大勢押しかけてきたそうだ。翌日の明け方に相撲は終わつたそうだ。少し喧嘩もあつたらしい。

### 貞成、北野天神の霊夢をみる

いつものように今日から百日間、琵琶や和歌の稽古を始めた。十日、晴。今日の明け方、夢を見た。夢の中で北野天満宮へ牛車に乗つてお参りした。天神様のご神前だと思つて、牛車を停めてお祈りをした。そうしたら天童のような人が現れたが、その姿ははつきりとは分からなかつた。その人は仏具である花形の土器かわらけのような物を投げて、私に与えてくれた。仏から利益りやくを与えられたような気持ちになつて、すぐにそれを懐に入れて。重ねてその人からまた品物が投げ与えられた。最初のものは皿のようなものであつたが、今度は土器であつた。その土器は金色に磨かれていた。また最初の花形の土器には模様があつて、いずれも小さくすばらしい品であつた。二つとも傍らにあつた紙に包んで懐の中に入れて。そしてまたお祈りをする心持ちがして、夢から覚めた。

### 霊夢は後小松上皇への自訴が叶う奇瑞

不思議な霊夢であつた。これもすべて天神様のご利益に預かる事を示す、めでたい前兆である。今、宮家が経済的に窮乏していることを後小松上皇様に訴えている最中である。この訴えが成就する霊夢であるので、うれしいこと極まりない。北野天神様をいよいよ深く信仰しよう。

朝早く獅子舞が来た。いつものように褒美を与えた。

法安寺猿楽を見物しませんかと寺から誘いがあつたので、見に行つた。息子・入江殿御稚児・松崖・東御方・上臈・今参・田向前参議・重

有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・阿古丸・聖乗・寿蔵主・梵祐らをお供に連れて行った。二人の女官も同じく来た。

まず住職のお部屋で一献の酒宴があった。その後、見物席に入った。猿楽は三番演じられた。いつものように褒美として太刀を与えた。日暮れに猿楽が終わったので、宮家へ帰った。御香宮や権現でも、いつものように猿楽があったそうだ。

【頭書】(日記の上方の隙間に書き加えた記事) この夢について、後日、思い当たることがあった。上皇様より八朔憑みのお返しがあつて、金の香箱などいろいろな重宝を下さつた。特別に重宝を数多くいただいたのである。この事を夢に見たのであろうか。いずれにしても天神様のご利益には違いない。

十一日、晴。芳徳庵主が来た。入江殿御稚児にお会いするために来たそうだ。お土産を持参して来た。酒を飲んだ。

十三夜名月の和歌を詠むよう、短冊を出して、面々に配つた。ところで、宮家の窮乏に関する私の訴えを書状に認め、上皇様へ献上した。いつものように、冷泉永基朝臣を通して送つた。

#### 貞成の異母兄弟・浄金剛院稚野寺主の一周忌

十二日、晴。廊御方が浄金剛院へ行った。今日は、亡くなった息子の稚野寺主の一周忌である。廊御方は焼香するために行かれたのである。

姪の入江殿御稚児が小隠庵へお入りになった。東御方・御稚児の母である上臈・我が妻である二条殿・重有朝臣も付いていった。小隠庵主が入江殿御稚児を愛おしんでいるためである。

#### 名月の夜に雨が上がったのは天に心があるからだろうか

十三日、雨が降っていたが、夕方には晴れた。今夜は名月だ。夕方に雨が上がったのは、天に心があるからだろうか。月は殊更に美しかった。いつものようにお月見をした。お月見には田向前参議らも参加した。名月を詠んだ和歌の短冊を取り重ねた。でも披露できなかったのは無念であ

る。和歌を詠んだのは私・漢詩で詠んだ松崖・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・行豊朝臣・慶寿丸・正永・やはり漢詩の真瑛らであった。

#### 南禅寺偶蔵主

十四日、晴。南禅寺の偶蔵主が来たので、対面した。来た二十七日が故禮準蔵主の十三回忌なので、法事の助成をしてほしいとのことだった。なんとしても形ばかりであるが助成しましょうと返事をした。それですぐに帰っていった。

#### 蔭蔵主松崖が鞍馬寺に籠もる

十五日、晴。蔭蔵主松崖が今日から七日間、鞍馬寺にお籠もりする。私に願ひ事がある。それで私の願書を奉納するように頼んだ。

十六日、晴。法安寺の住職が来た。宮家のために仁王経の祈祷をしてくれるそうだ。いつものように即成院へお参りした。

十七日、朝、台風による強風が吹き、雨も降つた。

#### 烏の夜鳴きは従者の口舌の予兆

十八日、晴。今夜の午前一時から夜明けまで村のカラスが東西に飛び立ち数回鳴いた。やめめカラスが月夜に鳴くことは常のことだが、これはただごとではない。おおよそ一晩中鳴き明かした。怪異であろうか。不審なので、占いの本を開いて見た。それによると従者のいさかい(※)の予兆らしい。恐ろしいことだ。

※「従者のいさかい」…家司である田向家と庭田家が境の垣根をめぐって絶交状態にあることを貞成は想起したのであろう(応永三十一年九月二日・四日条)。

二十日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。双調の烏破急・颯踏入破・賀殿急・胡飲酒破・陵王破を演奏した。長資朝臣は太鼓を打つた。

#### 丹波国山国荘御庵主の件

二十一日、晴。丹波国の山国荘御庵を用健がご管理する件について、ある僧が幕府へ住職に就きたいとの申請をしたそうだ。この件については鹿



苑院主と相談して用健が就任するように話が進んでいた。もしかしたら鹿苑院主は足利義量將軍にはお伺いを立てていなかったのかもしれない。不審なことである。話が変わってしまうのは無念なことである。

蔭蔵主松崖が鞍馬寺から戻ってきた。

二十三日、晴。姪の鳴滝殿が来た。前任職が亡くなってから、初めての来臨である。

#### 後小松上皇からの八朔返礼品が届く

二十四日、晴。上皇様から八朔贈答のお返しが来た。去年と今年、二年分のお返しを下さった。冷泉正永が持参して来た。今年の分として、金の香箱・堆朱（※）のお盆一つ・紫檀の机・紅の薄様で一包みにされた御沈香十両・引合紙十帖。去年の分として、御服三重として綾一反と練貫五反（※）・同じく綿五同（※）。いろいろな重宝で目を驚かさばかりである。めでたいこと限りない。金の香箱はとりわけ大事な宝物である。

このところ宮家が困窮している様子をなんども上皇様にお伝えしたので、特別にお考え下さったことであろう。重宝などを拝領し、上皇様のお心遣いが恐れ多くもうれしいこと、極まりない。

生島明盛が来た。これまた私が訴えたことに関して、特別に上皇様からの書状が出された。この件で上皇様からお言葉があり、宮家をなおざりにしないとのこと、うれしいこと極まりない。

#### 遊山で猪口を採る

夕方、遊山に出かけて、茸の猪口を採ってきた。鳴滝殿・入江殿御稚児・松崖・東御方・今参・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・正永・梵祐ら連れで行った。明盛も来た。即成院へ行き、一献の酒宴をした。この酒宴は私が主催した。夕方になって帰った。帰りがけ、退蔵庵に立ち寄り、いろいろと遊覧した。

#### 後小松上皇の御服を配分する

夜、上皇様からいただいた御服を宮家の者たちに分配した。綾の御服

は私が大切に（※）着ることにした。練貫は東御方・廊御方・上臈・二条殿に配った。今参には綿一同を与えた。宝物を持参してくれた正永にも練貫と綿を一つずつ与えた。

東御方は自分に配られた分を入江殿御稚児へお与えになった。この御稚児を東御方は特に養育するようにかわいがっていらっしやったので、御服を差し上げなされたのである。東御方のご芳志には、感悦極まりない。

酒宴を開いた。今回のお返しを特別にお祝いするためである。酒宴には重有朝臣らも参加した。田向前参議は京都に出かけており、不在だった。

※「堆朱」：底本では「堆紅」とある。

※「御服三重として綾一反と練貫五反」：底本には「御服三重」とあり、それに「綾一・練貫五」という割注が記されている。

※「綿五同」：同の単位は不明。後文にも「綿一同」とある。

※「大切に」：底本では「祝着せしむ」とある。

二十五日、晴。いつものように風呂に入った。午後三時に地震があった。夜に酒を飲んだ。正永がこの酒宴を準備してくれた。これは上皇様から御服をいただいた祝宴である。

#### 東御方の妹である入江殿円修房が御喝食を迎えに来た

二十六日、晴。御稚児が入江殿にお帰りになる。入江殿からはお迎えとして東御方の妹である円修御房が来た。珍しい客人なので、一献の酒宴などを準備させた。私の姪である鳴滝殿や妻の二条殿は円修御房と初めて対面なさった。宮家の女性たち・重有朝臣・長資朝臣・正永らも酒宴に参加した。

御稚児へ特別な引き出物として銚子提・引合紙十帖・沈香一包みを差し上げた。円修御房にも特別に引き出物を差し上げた。二人は夕方にお帰りになった。

聞くところによると室町殿は勸修寺家に滞在している小川宮御方のところへ行かれたそうだ。

### 後小松上皇が命じた伏見荘奉行職の件には従えない

二十七日、雨が降った。先日、私からの訴えに関連して、上皇様からお返事をいただいた。そのお返事に対して、今日、改めて申し入れをした。お返事の内容は伏見荘の現地管理者に関する上皇様から御命令であった。しかし、その御命令通りにするのは難しい理由を詳しく説明申し上げた。

当番の幹事である慶寿丸・梵祐・行光の三人が、毎月恒例の連歌会の準備してくれた。慶寿丸と梵祐が幹事を務めるのは、今回が初めてである。会衆は、重有朝臣以下、正永や明盛らであった。夜に入って、百韻を詠み終わった。

先日、上皇様からいただいた御綿を宮家の女性たちに配った。結局、男女四十人余りに配分したことになる。

今日の明け方、また地震があった。

二十八日、晴。正永と明盛が帰っていった。明盛にも、上皇様からいただいた八朔のお返しである綿などを分け与えた。

### 御香宮で御百度を踏む

二十九日、晴。御香宮へお参りした。願い事があったので、御百度を踏ませて(※)、願書を神前に奉納した。私が上皇様へ訴えている件がうまく行きますようにと祈念した。

田向前参議がこのところ、在京している。訴訟していることがあるらしい。夜に帰ってきた。

※「御百度を踏んで」…底本には「御百度せしめ」とある(自敬表現)。

しばしば貞成自身が百度参りをしている(応永二十五年(一四一八)七月十八(二十日)〔御香宮〕・応永二十七年六月八日条〔法安寺薬師如来〕・応永二十八年十二月八日〔御香宮〕・応永三十一年十二月十三日

〔法安寺〕・応永三十二年八月六日〔御香宮〕)。法安寺の薬師如来に病氣治癒のお礼に自分自身で千度参りをすると約束したこともある(応永二十九年十一月八日)

その一方で、伏見荘の地侍たちに御香宮千度参りをやらせたり、山田宮と権現に千度参りの祈祷をさせたこともある(応永二十五年七月十九日)。また法安寺の僧に法安寺薬師如来百度参りを命じている(応永二十九年十一月八日)。

この九月二十九日の記事や応永三十一年九月二十九日の御香宮お百度参りも使役形で表現されているが、使役の対象が記されていない。そこで、いずれもこれを自敬表現とみて、貞成自身が百度参りをしたものと解しておく。

孟冬朔(十月一日)、空は晴れた。「めでたい兆しがあり、すべてのことにおいてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。このお祝いに重有朝臣らも参加した。

### 田向経良がたびたび京都に出かける理由が不明

田向前参議がまた京に出かけた。伏見荘のことで奔走しているのだろうか。不審である。

### 遊山で猪口を採る

野遊びに出た。息子・鳴滝殿・東御方・上臈・塔頭御寮恵芳・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸・阿古丸らを連れて行った。松原あたりで茸の猪口を採って帰った。その猪口を少し味わった。

三日、晴。用健がいらっしゃったので、一緒に指月庵へ行った。田向前参議・長資朝臣も連れて行った。

ところで山田宮の造営のために、芝俊阿がその用材として数十本の木を切った。それに対して大光明寺が反対している。大光明寺境内の木を切つてはいけないということは、父・大通院の時代にお決めになられた大法である。それなのに、自分勝手に木を切るのはよろしくないことだ。

廊御方のお部屋で酒を飲んだ。田向前参議がその酒宴の準備をしてくれた。

四日、晴。姪の鳴滝殿がお寺へお帰りになった。御引き出物や御土産などを差し上げた。

#### 山城国武蔵堀池から出される仕丁三十人

さて山城国武蔵堀池から出される三十人分の人夫役は、父・大通院がご恩地の代わりとして廊御方へ配分していた。それで、廊御方の息子である浄金剛院権野寺主がこの人夫を召し使っていた。しかし権野寺主が亡くなってしまったので、この人夫役を鳴滝殿にお譲りしたいと廊御方が仰っている。それで武蔵堀池人夫役三十人分を預けるといふ内容の書状を、今日、鳴滝殿に差し上げた。

生島明盛はご恩地武蔵堀池の事務取扱役をしている。この人夫役三十人分のうち数人分は、事務取扱者の分として明盛が召し使うことになるだろうか。

六日、晴。島田定直六条院庁官が連絡してきた。来たる二十八日に相国寺に上皇様（※）がお出ましになるそう。それは天龍寺へお出ましの先例にならっているそう。それで天龍寺に天皇がお出ましになった記録をお借りしたいと定直は申し出てきた。そのような記録は所持していないと返事をおいた。また諸家でもお出ましの準備で一生懸命になっているのであろう（※）。

#### 内野御経

いつものように、平安京大内裏の跡である内野を供養するためにお経を読む法会が行われたそう。

※「上皇様」…底本ではただ「御幸」とあるが、本年十月二十九日条には「仙洞」とあるので、後小松上皇と解した。

※「また諸家でもお出ましの準備で一生懸命になっているのであろう」…底本では「また諸家営々か」とある。

八日、晴。いつものように風呂に入った。

田向家では来たる十四日に仏事がある。今夜からお経を読み始める。僧侶や俗人の子供たちが集まっているそう。これは故田向資陰三位の三十三回忌である。

#### 庭田重有は毎年、いろいろな女性に子供を産ませている

ところで今夕、庭田重有朝臣に男の子が生まれたそう。重有の正室が子を産んだ。慶寿丸と同じ母親である。重有は毎年、いろいろな女性に子供を産ませている。これは家が繁盛する基盤でもあるが、一方では重有がとても好き者であるということであろう。

九日、晴。今夜は亥子である。いつものように亥子餅を食べた。

#### 正親町三条家に川魚を贈る

十一日、晴。正親町三条家に川魚を贈った。私の上皇様への訴訟を取り持つてくれたお礼である。「明日は、室町殿のご命令で、拙宅に日野資教一位入道や裏松義資中納言らをご招待することになっています。ちょうどこのような折節ですので、もてなしのための川魚は貴重です。特に恐れ多くうれしく存じます」と正親町三条家は返答してきた。

十三日、明日は田向家で仏事が営まれる。行豊朝臣や大教院隆経法印らが来た。

#### 田向家と庭田家が仲直りする

ところで、田向経良前参議と庭田重有朝臣が喧嘩をして絶交しているのはよくないことなので、私の妻二条殿庭田幸子と田向経良の妻である芝殿が仲裁に入った。両方に教訓を与えて、今日、両家は仲直りした。それで今夜、重有朝臣が田向家へ呼ばれた。公私ともに和睦したのは、とてもめでたいことである。

#### 綾小路信俊と田向経良の絶交は解けず

また綾小路信俊前参議も田向経良前参議と絶交している。芝敷地の件で、田向が芝俊阿を鼻負した。このことを綾小路が遺恨に思っって仲違い



したようだ。この二人はたびたび絶交し、さまざまに仲直りしてきたが、また仲違いしている。外聞としても、また実際にも、これは穏便ならざる事態である。また公家としても粗忽な振る舞いである。

今度のことは田向前参議の行いが度を超している、私が中に入って田向前参議に教訓を与えた。しかしまだまだ腹を立てているので、私の仲裁も効果がなかった。年老いてから絶交するのは無用なことであり、またつまらない話でもある。

行豊朝臣が来たので、雑談をした。後小松上皇様の相国寺へのお出ましは、来月二日に延期となったそうだ。また足利義量將軍は今日、参議兼近衛中将に任命されたそうだ。これは、上皇様のお出ましに將軍もお供をするための処置だという。

十四日、晴。田向家の仏事に、用健・大光明寺の僧たち・退蔵庵主ら招かれた僧は十人あまりだそうだ。ただ、特別な法会をしたわけではない。

#### 石清水八幡宮神人と東竹権別当家臣との喧嘩

さて石清水八幡宮神人がまた不思議な騒動を起こした。去る十一日のことである。東竹という権別当の坊舎前庭に木が植えてある。その前を神人が礼儀なく通り過ぎていったので、東竹の家臣どもがそれを咎めた。それに対して神人は立ち帰って悪口を言った。挙げ句の果て、神人は腰刀を抜いて斬り掛かってきたので、家臣どもは神人を殴った。そうしている間に仲間の神人たちがその坊舎へ押し寄せようとした。しかし東竹の家臣どもは坊舎の中に逃げ込んだので、無事に事が収まった。

#### 石清水八幡宮神人、室町幕府に嗾訴する

しかし神人たちの鬱憤はなお収まらなかったようだ。その殴られた神人を死んだかのように装って輿に乗せ、それを舁いで京都市内まで出てきた。神人たちは大勢を率いて、幕府に訴えた。室町殿は因幡堂にお籠もりしていたので、神人たちはそこに押しかけて訴えた。

室町殿は石清水八幡宮担当事務官の飯尾為行加賀守に言いなさいと仰ったので、神人たちは飯尾加賀守の屋敷に向かった。神人百人ほどが白い狩衣の上に甲冑の腹巻を来て、合戦できる用意をしていた。とても強引な訴えであった。

#### 京極侍所司・太田問注所・飯尾八幡宮奉行らの軍勢による反撃

そうこうしている間、室町殿は神人を逮捕するよう、侍所・問注所・八幡宮担当の加賀守らにご命令していた。それで今日の昼頃、京極高数侍所長官と太田康雄問注所長官二大名の大軍勢が加賀守の屋敷に押し寄せた。飯尾加賀守の屋敷内でも武装して待ち構えていたところ、侍所・問注所の軍勢共が門前から攻め入ったので、神人たちは屋敷内に逃げ込もうとした。ところが屋敷内からは飯尾加賀守の軍勢が待ち構えていたので、神人たちは内外から取り囲まれて一斉に檢挙されそうになった。しかし神人たちももとより武装して合戦の準備をしていたので、散々に戦い合った。

#### 神人の死骸は車に積まれ五条河原に捨てられた

それで神人二十七人、また別の説では三十七人といわれているが、その場で打ち殺された。そのなかで、神人の大将は切腹して果てたそうだ。幕府軍が生け捕った神人は五十人ばかりで、その全員が負傷していた。その中でただ一人だけが無傷だったそうだ。攻め手の侍所・問注所の軍勢でも大勢が負傷し、死人も少々いるらしい。加賀守の軍勢でも大勢が負傷し、飯尾加賀守自身も怪我をしたそうだ。神人の死骸は車七両に積んで五条河原に捨てられた。合戦の状態は目を驚かし、言葉に言い表せないほど悲惨な状況だそうだ。

#### 八幡神は神人たちを見放したか

この夏、神人の強引な訴訟は国を揺るがすほどであったが、無事に終わった。ところが今また思いがけない騒動が起こって、神人が何人も命を落とした。もしかしたら彼らは神様のご意向に背いた結果、滅亡した



のであろうか。不審なことである。神様の思し召しはいかばかりであろうか、計り知れない。

### 東竹家は田向家の縁者

石清水八幡宮境内でも騒動が起きていた。神人の仲間がなお悪巧みをしようとしているので、室町殿は諸大名に出動を命じた。軍勢共が出動して社頭を警護したそうだ。権別当の坊舎でも警護の軍勢が集められた。東竹家は田向家の縁者なので、小川有善以下伏見荘の村人たち五十、六十人が警護に協力するため、田向家より権別当の坊舎へ派遣された。思いがけない騒動であった。

### 大地が鳴動する

十五日、朝、雨が降った。とてもひどい大雨だった。大きな音が鳴り響き大地が揺れた。しかし雷ではない。不審なことだ。

昨日の合戦の噂は、相変わらずである。逮捕された神人のほとんどは処刑されたそうだ。

### 鹿三頭の怪異

ところで、神人たちが東竹の坊舎に押し寄せようとした時、放生川のあたりで神人たちは集まって話し合っていた。そこへ鹿が三頭走り出てきた。神人は騎馬武者が駆け出してきたものと勘違いして、武器を捨てて左右に逃げ散ったそうだ。そして鹿三頭が通り抜けていく間も神人たちは逃げ散ったままで、戦おうとはしなかったそうだ。これもすべて神慮だろうか。

負傷して生け捕られた神人四十人ばかりは、そのまま死んだそうだ。張本人の神人は今朝、賀茂川の河原で首を刎ねられたそうだ。昨日、死んだふりをしていた神人は奥から抜け出して逃走していたが、侍所の軍勢が見つけ出し九条辺りで切り殺したそうだ。

### 宮家の修繕を思い立つ

十九日、晴。宮家御所の御修繕を思い立ち、あれこれ企画した。修繕の事

務取扱を土倉の宝泉房に内々に命じた。大工を呼び出し、修繕する箇所をあれこれ命じた。今後、吉日を選んで工事させるつもりである。

### 円光院堯範法印が播磨国比地をご恩地として拝領する

二十一日、朝に雨が降り、雷が鳴った。円光院堯範法印が酒宴一献分の菓子一箱・酒樽二つ・贈呈する銭の目録二通を持参して来た。これは、播磨国比地の祈禱用領地支配を認める命令書をいただいたお礼である。廊御方にも一献分少々の銭を進上なさった。重有朝臣がこの命令書を執筆した。そのお礼として重有朝臣にも同じく一献分少々の銭が進上された。

法印と初めて対面した。法印との酒宴には、東御方・廊御方・田向前参議・長資朝臣以下も参加した。重有朝臣は京に出ていて不在であった。一献が数献に重なってから、法印は出ていった。

今夜は亥子なので、いつものように亥子餅を食べた。

### 琵琶法師の城竹

二十四日、晴。いつものように風呂に入った。琵琶法師の城竹が来た。明日来るように命じたら、城竹はすぐに出ていった。

### 紅葉狩り

夕方、蔵光庵へ紅葉を見に行った。松崖・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸も行った。次に即成院へ行つて、一献の酒宴を開いた。私が主催したのである。即成院もまた酒を用意してくれて、数献の酒宴となった。酒宴に紅葉も色を添えてくれて、少なからず趣があった。

二十五日、晴。城竹に来るよう言っておいたのだが、朝早く帰ってしまったそうだ。

遊山に出かけた。重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。指月庵に行き、塔頭大通院にも行った。そしてしばらくして帰った。

ところで上皇様の相国寺お出ましが来月に延期となっていたが、また二十九日に決まったそうだ。五山寺院以下の長老たちが皆、集まるとい

う。大光明寺長老も行くそうだ。ただし当日、旅の僧は一人も相国寺には入れないらしい。

### 粥順事を始める

二十六日、晴。順番で御粥を炊く会を始めた。二条殿が準備なされた。

毎月恒例の連歌会、今月は当番の幹事がいないので、当番の順番を繰り上げて行った。会衆は田向前参議以下、いつもの面々であった。午後十一時になって百韻を詠み終わった。

二十八日、晴。聞くところによると、今日、仁和寺御室永助法親王のお弟子である承道法親王が灌頂かんじょうの儀式を遂げたそうだ。承道法親王は木寺宮世平王の子息で、後小松上皇様の御養子である。永助法親王の代わりに崇光上皇の子息である相応院主弘助法親王が灌頂をお授けになったそうだ。

廊御方のお部屋で酒を飲んだ。伏見荘関係のことで、役人の小川禅啓がこの酒宴を用意した。松崖や田向前参議以下寿蔵主が酒宴に参加した。

### 後小松上皇の相国寺御幸

二十九日、朝は曇っており、昼には雨が降った。今日は、上皇様の相国寺お出ましの日である。午後一時半に上皇御所をご出発になった。お車寄せには洞院満季内大臣が控えていた。御車は八葉の牛車で、御服は御狩衣だそうだ。お供する公卿や殿上人はいろいろな織物の狩衣を着ていた。

### 足利義量が初めて出仕した

#### お供の公卿

広橋兼宣一位大納言・正親町三条公雅大納言・裏辻実秀権大納言・日野有光大納言兼院執権・徳大寺実盛大納言・万里小路時房中納言・日野義資中納言・勸修寺経興中納言・西園寺公名参議兼中将・花山院持忠参議兼中将・征夷大將軍足利義量参議兼中将、義量將軍は御太刀持ち役で初出仕。裏松資任侍従が後見役として付き従った。

#### 殿上人

広橋宣光蔵人頭兼右中弁・山科教豊中将・白川雅兼神祇伯兼中将・飛鳥井雅永中将・一条公知少将・高倉永豊侍従・日野資親侍従

#### 下北面

源康基・同康久・藤原定衡・源康長・藤原久国

御隨身、召次十人・御牛飼い八人

寺中での様子。惣門で御下車。山門に、相国寺現住職以下五山寺院の長老たち・諸寺の長老・相国寺の前住職・寺中の僧たちが集まっていた。相国寺大衆が「薬師如来(やすしらい)(※)を唱える

僧たちは「薬師如来」を唱えた。それは「皇帝万歳万々歳、薬師如来、天下大平、釈迦如来」という唱え言であった。上皇様をお迎えするに当たって、僧たちはこの唱え言を三回唱えた。

次に現住職が住む堂に上がられた。御見物席にお入りになって、唱え言などをお聞きになっていた。その後、住職のお部屋にお入りになり、お茶をお飲みになった。軽食は出されなかった。御軽食を寺では用意していたが、上皇様がお止めになられたそうだ。上皇様に御引き出物として織物の小袖・五重のお盆・香箱などが献上された。

### 足利義持の引導で諸塔頭を巡礼する

その後、諸々の塔頭を廻られた。鹿苑院・開山塔と呼ばれる宗寿院・常光国師の塔頭である常徳院・絶海国師の塔頭である勝定院・輪蔵。寺の中では御手輿にお乗りになっていた。御手輿を昇ぐ御力者は六人。この御手輿は妙法院が進上されたものという。塔頭ごとに同じように御引き出物が献上された。ただし勝定院では飾りなど特別な御引き出物が進上されたそうだ。直綴じきとを着た室町殿が寺内をご案内なされた。塔頭を御巡礼し終わって、現住職のお堂に戻られた。

この時分には雨が降り出した。見物席や立てられた牛車、それに庶民の見物人がびっしりと隙間なく群れ集まったそうだ。相国寺惣門から法

界門まで畠山満家管領が警護していた。上皇御所から法界門までは斯波義淳勸解由小路左兵衛佐が警護していたそうだ。

住職のお堂へお戻りになってからは、室町殿が一献のお酒を進上なさったそうだ。当初は室町殿の御所へもお出ましになると言われていたが、それはなかった。

相国寺の僧以外、旅の僧は一人も寺内へお入れにならなかった。少年僧や稚児も表には出させなかった。すべてが嚴重で、見事な様子は言葉に尽くせないほどだったそうだ。

※「やすしらい」：底本には「薬師如来」に「ヤスシライ」とルビがある。十一月一日、晴。「めでたい兆しがあり、すべてにおいてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。蔵光庵に行き、紅葉を見てきた。松崖・田向前参議・重有朝臣・長資朝臣・慶寿丸を連れて行った。庵主は留守だった。一覽してすぐに帰った。

二日、曇っており、夕方には雨が降り出した。御所の御修繕、明日から工事させることにした。この件の事務取扱者は小川禅啓である。ただし修繕経費などについては土倉の宝泉に取り扱わせることにした。

#### 蔭蔵主松崖がしばらく近江国に隠居する

ところで蔭蔵主松崖は明日、近江国に向かう。常光国師が管理していたお寺で根西堂が住職をしている。根西堂は松崖と同じく共に常光を師匠と仰いだ仲である。その寺にしばらく隠居するそうだ。経済的に苦しんでいるので、天龍寺にはしばらくの間休暇を申請したという。

錢はなむけとして酒宴をした。用健・宮家の女性たち・田向前参議・重有・長資朝臣・寿蔵主らがこの酒宴を開いたのである。私も少しであるが、この酒宴に助成した。しばらくは近江国に留まるというので、少なからず名残惜しい。

#### 宮家御所の修繕を開始する

三日、雨が降っていたが、昼には晴れた。今日は吉日なので、御所の東面

の棟の屋根を新たに葺き始めた。修繕の開始を祝って、祝宴を開いた。田向前参議以下がこの祝宴に参加した。

松崖は朝早く近江国に旅立った。

四日、晴。屋根の上葺工事は、昨日と同様、続いている。宝泉が内々に事務取扱をしてきているので、特別に一献の酒宴を設けて、着替え部屋に呼び入れ、酒を飲ませた。

#### 尼衆が御所内に乱入する

ところで尼衆が五、六人、輿に乗って御所内に入り込み、いろいろと見て回っている。工事中的見苦しいところに乱入されると恥ずかしいので、修繕箇所にも幕を下ろして隠した（※）。彼女たちは入江殿尼衆と名乗っていたが、そうだろうか。見た感じでは守護大名の関係者のようだった。

※「工事中的見苦しいところに乱入されると恥ずかしいので、修繕箇所にも幕を下ろして隠した」：底本には「見苦しき所への乱入を恥としてこれを下ろす」（見苦敷所乱入為恥下之）とある。

#### 伏見荘の村人たちに築地を築かせる

五日、晴。修繕工事は昨日と同様である。南側の屋根付きの土塀を東西から築いていった。伏見荘一荘の者どもを呼び集めて、土塀を築かせた。この工事の事務取扱を小川禅啓にさせた。お弁当などは村人の自前で、すべて自力で築かせた。ただし宮家から村人たちに酒を振る舞った。

#### 相国寺鹿苑院に大強盗団が乱入する

ところで聞いたところによると、今夜、鹿苑院に大強盗団が乱入し、財物などを盗み取ったそうだ。僧侶が二人、強盗に殺されたそうだ。

#### 資材の竹木提供を寺庵に命じる

六日、晴。修繕工事は昨日と同様である。土塀は今日、完成した。資材の竹木などは寺庵に雑税として提供させた（※）。

ところで通常は源内次郎に御大工を命じているが、宝泉が事務取扱者

として個人的に使っている大工に仕事をさせたいと頻りに言ってきた。それでその通りにしなさいと宝泉に命じた。

それで源内次郎が面目を失ったと歎いてきた。源内次郎の言い分は、もつとも道理な事である。しかし、今回は特別な事情があつて別の大工に命じたことを説明した。それで、酒肴分の銭を与えて、源内次郎をなだめた。

※「雑税として提供させた」：底本では「天役としてこれを所望す」とある。寺庵に対する遠慮がみられる。

七日、晴。修繕工事は昨日と同様である。宝泉の代理として事務取扱をする良暹が一献分の酒を献上してきた。思いがけず神妙なことである。僧侶なので私の御前に呼び出して一献の酒を与えた。そしてそれが数献に及んだ。

八日、晴。修繕工事は昨日と同様である。

#### 初雪の雪見酒

九日、初雪が降った。廊御方と田向前参議が雪消しの贈答として酒を用意してくれた。その酒で雪見の酒宴をした。修繕工事は昨日と同様である。

さて聞いたところによると、上皇様も初雪を愛でられたそうだ。それで昨夜、上皇御所で御連歌会があつた。

松や千代 初雪よりの 深緑 上皇様

下葉には 朝日隠れか 蘆の雪 同じ

室町殿から雪消しの和歌の贈答がなされた。

浦島の 箱屋の山の 雪ながら

明けてうれしと 君や見るらん 室町殿

万度<sup>よろすたび</sup> 君ぞ見るべき 十界の

花に 降りなす 松の白雪 同じ

上皇様のご返歌については聞いていない。尋ねてみよう。

十日、晴。修繕工事は昨日と同様である。世尊寺行豊朝臣が来て、世間話

をしてくれた。

#### 宮家外回りの修繕が完工した

十一日、晴。伏見荘一荘の村人たちを呼び集めた。それで、土塀や堀以下、大路の普請・宮家の修繕・屋根の上葺など、すべてが今日、完工した。十二日、晴。内装工事として、廂の間の飾りとなる棚などを作った。

風呂に入った。その後、小川禅啓が一献の酒宴を準備してくれた。宮家修繕の祝宴だそうだ。

十三日、晴。内装工事は昨日と同様である。即成院主らが一献の酒宴を用意してくれた。即成院主老僧の梵基・梵祐・善基らが来た。数献に及ぶ酒宴を丁寧を用意してくれた。これは毎年のことである。酒宴には田向前参議以下も参加した。

#### 後小松上皇へミカンを献上する

ところで上皇様へいつものように蜜柑二籠を差し上げた。すぐにお返事があつた。

十四日、晴。内装工事で廂の間を飾り終えた。

#### 下野良有の息子が元服した

伏見荘の地侍である下野良有の息子が成人式をあげたそうだ。この若者が一献の祝い酒を持参して来たので、対面してやった。そしてすぐに出ていった。その間、酒を飲んだ。田向前参議も一緒だった。

#### 安祥寺実意が若宮に浪平作の太刀を進上する

さて安祥寺の実意が浪平の作という太刀を息子に進上してきた。思いがけず、神妙なことである。この僧は勧修寺門跡の僧として出世して大納言僧都と呼ばれていたそうだ(※)。しかし世を遁れて安祥寺と呼ばれるようになったという。実意は廊御方の知人であり、廊御方を通して太刀を献上してきたのである。

※「勧修寺門跡の僧として出世して大納言僧都と呼ばれていたそうだ」：底本は「勧修寺門跡出世大納言僧都云々」とある。



十五日、雨が降った。今回の修繕の一環として、台所を修理した。十六日、雪が降った。しかし特に雪見の酒宴は開かなかつた。ともかく寒いばかりである。私一人で和歌を詠んだ。

我のみや 跡をも付けん 庭の雪

今朝は問い来る 人しなければ

松の末<sup>うれ</sup> 木々の梢は 薄けれど

情けは深き 今朝の白雪

今夜は、いつものように即成院念仏会に参列した。そこで少し一盃の酒を飲んだ。来たる二十日は父・大通院の御年忌である。それで今日からお経を読み始めた。

### 右衛門督局が上皇御所へ復帰する

ところで、故典侍禅尼の姪である右衛門督局が今日、上皇御所に復帰したそうだ。右衛門督局はこの四五年、上皇様からお叱りを受けて自宅に謹慎していた。ところが典侍禅尼が他界したので、お許しが出て、御所に復帰したという。これで一安心。めでたいことである。

十七日、晴。宮家の修繕はまだ完工していないが、今日で仕事をいったん休止することにした。事務取扱の宝泉が休暇を申請してきたからである。

### 足利義持にミカンを進上する

十八日、晴。室町殿に蜜柑を二籠進上した。田向前参議が持参して、夜に戻ってきた。田向が語って言うことには、室町殿は北野天満宮にお籠もりされているそうだ。それで高倉永藤と相談したら、高倉がまず受け取ってくれた。

高倉は蜜柑を下僕に持たせて、北野天満宮へ行かせたところ、天満宮では取り次いでくれる人が居らず、仕方なく持ち帰ってきたそうだ。この経緯を永藤が話してくれた。そこで「室町殿が天満宮からお戻りになる時にお渡ししましょう」と永藤が言ってくれた。それで高倉卿に蜜柑

を預けてきたという。あれこれと気を使ってくれたのは、神妙なことである。

### 貞成の姪が出家して岡殿真栄となる

十九日、晴。今日は岡殿で、亡くなった兄の娘である御稚児が出家した。御戒師は元応寺長老だそうだ。入江殿ご住職が万端手配して下さった。西雲庵妙喜御房がお供について行ってくれたそうだ。御稚児のご法名は真栄となった。めでたいことである。

二十日、晴。父・大通院の御年忌なので、焼香するために大光明寺へお参りした。田向前参議・重有・長資ら朝臣・慶寿丸を連れて行った。一時間ほど塔頭・大通院での読経に参列した。読経が終わって宮家に帰った。宮家御所でも型通りの御仏事をした。即成院の院主老僧・善基・梵祐、法安寺住職、禅照庵主、塔頭比丘尼たちがいつものようにお経を読んでくれた。その後、いつものように食事を出した。男どもも大勢、僧尼の食事にお相伴した。

ところで行蔵庵主寿蔵主は来なかった。最近、寿蔵主との間で不愉快なことがあったので、招待しなかったのだ。前々は御仏事の事務取扱者をしてもらっていたが、その任務を今回は命じなかった。

今度の宮家御所の御修繕に際して、伏見荘内の寺庵一同に資材として竹木を提供してもらった。ところが行蔵庵はとかくあれこれと反対意見を言って、竹を進上しなかった。結局、大光明寺・退蔵庵などからは今後、竹木を一切提供しないことを徹底して確認なさったそうだ（※）。

### 行蔵庵主寿蔵主の逆恨み

寿蔵主は宮家に来て、いろいろと無責任なことを言い放ち、宮家を馬鹿にした言葉を吐いた。とんでもなく乱暴なことをした。これは、御所御修繕の事務取扱を前々は寿蔵主に命じていたが、今回は宝泉に命じたことを逆恨みしての、意趣返しなのだ。とてもよろしくないことだ。それもすべて年老いて、もうろくしたためだろう。

**琵琶「虎」を修理する**

大工の源内次郎が来たので、「虎」の銘がある琵琶の修理を命じた。

※「徹底して確認なさったそうだ」…底本には「根を入れられる云々」とある。

**朝廷から派遣された河原者が植木の調査に来た**

二十一日、晴。最近、内裏では前庭の御池を御整備なさっているそう。それで伏見荘の寺庵の植木を召し集めて進上しなさいと、慈光寺持経を通して朝廷からのご命令があった。それで三人の河原者を現地調査のため派遣なさった。すぐに寺庵へご命令の内容を伝達した。

大光明寺と蔵光庵は異議を申し立てた。室町殿にお伺いを立てて、室町殿のご命令にしたがって、植木を進上しますとのことだった。一方、退蔵庵・行蔵庵・静隠庵からは、すぐに了承しましたとの返事が来た。その他、村人や土蔵の庭なども、河原者は調査していた。

宮家の庭にはしかるべき植木はない。しかしご不審をもたれると面倒なので、御使者の河原者に宮家の庭も調査させた。田向家の庭も同じく見せた。以上のような事情を詳しく持経に返答しておいた。

二十三日、晴。朝廷の厳命であることを持経が重ねて書状で伝達してきた。「いずれにせよ伏見荘内のことは貞成王のお計らいに従うべきであり、寺庵が異議を申し立てるのはよろしくない。御使者が調査した箇所で適当な植木があれば取りまとして進上しなさい」と厳しい命令が下された。それで寺庵にこのご命令を伝えたと、しかたありませんと了承した。

静隠庵の松一本をまずは進上した。それ以外の木はお借りする荷車五〇六両に乗せて進上すると持経に伝えた。

**光明上皇ゆかりの柏植**

蔵光庵には柏植びやくしんの木がある。これは光明上皇様がお植え置かれた木だそう。この木のことはかねてより称光天皇陛下のお耳に入っているそ

うだ。これを掘り取りなさいと陛下は河原者にお命じになられたそう。

この木を大事にしてきたので、蔵光庵ではとても混乱した。室町殿は石清水八幡宮にお籠もりになっており、お伺いを立てることができない。蔵光庵主も留守だ。留守居の僧は困り果てていたが、陛下のご命令なので仕方なく了解してくれた。

河原者は諸方へ走り回り、寺庵や民家が大事にしている木々を調べて報告していた。そしてそれらをすぐに押し取っていった。諸人が慌てふためいた。

**称光天皇の勅言**

「天皇の土地に生を受けた者は誰であつても、朝廷に木を指し出すことを惜しむべきであろうか」との、陛下のお言葉があったそう。

**琵琶「仙家」**

今日もまた仙家の銘がある琵琶を修理に出した。

二十四日、雪が降った。とても寒いので、雪を楽しむ興趣も湧かない。河原者たちは今日も、寺庵の木などを掘り取っていった。

**寛平・延喜御記、朝観行幸部類記、諸社諸寺御幸記**

二十五日、晴。寛平・延喜御記、朝観行幸部類記三箱、諸社諸寺御幸記の合計五箱分の御記録を上皇様へ進上した。後深草上皇以来伝えられてきたもので、祖父の崇光上皇や父の大通院が特に大事にしてきたものである。しかし上皇様へ御訴訟をしていることもあるので、しかたなく進上した。正親町三条公雅大納言が訴訟を取り持つてくれたので、彼卿を通して献上した。

すぐに上皇様からお返事があった。「このような記録を紛失していたので、御大切にしていたところ進上して下さり、うれしく思います」などと、上皇様からいろいろお言葉をいただいた。「特に寛平の宇多天皇・延喜の醍醐天皇両代の御記録をいただいたのは、幸せの至りであり、感謝してあまりありません」とのことだった。私からの訴訟についてはなお

ざりにしませんとの仰せもあり、まずもって喜ばしいことである。

### 勅使として世尊寺行豊が伏見荘の木を再調査しに来た

ところで内裏から世尊寺行豊朝臣が使者としてやって来た。寺庵の木を厳しく取り立てたことを陛下が喜んでいらつしやるとの仰せであった。寺庵に對しても使者を遣わして褒めなさいとの仰せもあったという。伏見荘の村々にまだ然るべき木があるか調査して来なさいとのご命令も出たそう。行豊に村を案内する者を付けるようにとのことだった。いつものように風呂に入った。

### 内裏へ木を再度進上する

二十六日、晴れていたが、夜に雨が降った。内裏に木などを進上した。宮家前庭の梅の木一本を献上した。行蔵庵の梅一本と岩ツツジ一本、退蔵庵の松三本、静隠庵の松一本、かれこれ合計十三本を進上した。荷車六両を京から取り寄せて、これに木を載せて内裏に運んだ。

この他、伏見荘の村々に適当な木がないか尋ねたが、まったく然るべき木はないという返答だった。それで行豊朝臣は帰っていった。

重ねて御使者を派遣して下さり恐れ入りますと、勾当内侍を通して陛下に私の書状を差し上げた。いつものように御香宮へ参詣した。

### 山城国大野荘

ところで田向前参議が田舎である山城国大野荘へ行くので、お暇を下さいと言ってきた。それでいささか饒の気持ちを表すために、酒宴を開いた。

### 上杉家中の対立

さて上杉頼方が面目を失って、今日、没落したそう。前の上杉の子息四歳を惣領として取り立てようと細川満家現管領がその子の身柄を確保したそう。それで騒動となった。細川満元前管領は上杉頼方を鼻負にしている。一方、満家現管領は前の上杉に味方している。この両方で対立しているそう。しかし詳しくは記録できない。

### 田向経良、山城国大野荘に下る

二十七日、雨は上がったが、曇っていて、まだ晴れない。田向前参議が朝早く田舎である大野荘へ行ったそう。

### 行蔵庵珠侍者がお詫びに来た

夜に行蔵庵珠侍者が来た。一献の酒宴を準備してくれた。そしてそれが数献にも及んだ。酒宴を用意してくれた趣旨は、行蔵庵主寿蔵主の不義を謝るためだという。お詫びのつもりだろうか。神妙である。行蔵庵の竹を二、三本進上してきた。

二十八日、晴。大工が来て、残る箇所を修繕を加えた。いつものように廊下御方が順番で薪を焼く会の用意をした。今月の連歌会は当番幹事がないので、薪の会に集まっている面々で連歌を詠もうとしていたら、内裏から使者として慈光寺持経が来た。

### 勅使・慈光寺持経

持経は故慈光寺通光三位入道の孫である。初めて宮家に来たので、私はまだ会ったことがなかった。思いがけない来訪で、とりわけ初めての宮家参上だった。修繕などで取り散らかしている最中だったので、この来訪に驚き戸惑った。しかし、すぐに対面した。

### 称光天皇直筆の女房奉書

持経は天皇陛下直筆の女房奉書（※）を持参していた。その奉書には、木を進上してきたことを嬉しく思っている旨の仰せが記されている。先日、行豊朝臣を通して同じ内容の仰せを既にいただいている。この度、重ねて御使者を遣わされたのは、特別なお気持ちがあつてのこと、恐れ多くも嬉しいことだ。

持経は初めて宮家に来たので、お土産として酒一献分の錢二貫文も持参して来た。神妙なことである。彼は薪を焼いている座敷に押し入ってきた。見苦しい状況だが、「お恥ずかしいことはありません」と頻りに言いながら、持経は入ってきた。すぐに一献の酒宴をした。



すでに日も暮れていたもので、今夜は泊まっていくという。それで連歌会を仕切り直した。会衆は少なく、重有朝臣・長資朝臣・持経・善基・聖乗・梵祐・行光らである。明け方になって、百韻を詠み終わった。持経には間違いなく連歌の才能がある。珍しい客人が宮家に来て。とても嬉しかった。

※「女房奉書」：底本ではただ「奉書」とあるだけだが、女房奉書であろう。女房奉書（にようぼうほうしよ）とは、主人の上意を受けて、女房が散らし書きで書いた書状。この事例のように主人自身が執筆することもある。

二十九日、晴。朝早く持経は帰っていった。帰る前に、簡略だが一献の酒宴をした。特別に太刀一振りを持経に与えた。陛下には、私の書状を献上した。たびたびの仰せで恐れ入りますと認めた。

今日も同じく残る箇所を修繕させた。

#### 伏見宮家の修繕が完了した

三十日、晴。修繕は今日で終了、完工だ。数日にわたる工事が無事終わって、めでたい。事務取扱代理の良暹はよくやってくれて、神妙だった。嬉しかったので、良暹を私の御前に呼び寄せて、酒盃を与えた。さらに扇などちよっとした引き出物も特別に与えた。良暹は恐れ多くも嬉しいです。といいながら、出ていった。

#### 後小松上皇に出家の希望あり

ところで上皇様からお手紙が来た。開いて見ると、「伏見上皇のご出家に関する記録に大事なことが書かれています。後光厳上皇の御代にこの御記録を崇光上皇へお渡しになられたようです。その内容を写して置いたのですが、紛失してしまいました。私も出家したいという気持ちがあります。この御記録の正本をお借りしたいと思います」と書かれています。「急ぎ見つけ出して進上します」とお返事をしておいた。とりあえず冷泉永基朝臣を通してご納得をいただけるよう、内々に返事をして

た。この出家のご希望、来年四月に後円融上皇の三十三回忌があるが、それにあわせてのご出家ということなのだろうか。

【頭書】慈光寺持経から書状が届いた。昨夜、上皇様にお仕えした折、この伏見宮家が経済的に困窮なさっていることを持経がお話したところ、上皇様はそのことを快諾して、宮家をなござりにはしないと仰っていたそうだ。内裏の御使者として宮家に参上した状況も詳しくお話ししたそうだ。

十二月一日、晴。「めでたい兆しがあり、すべての事においてとても幸せだ」と予祝した。いつものように月始めのお祝いをした。

#### 伏見院正和二年御出家事、後伏見院御記、後深草院御出家、正応御記

上皇様に昨日のお返事を差し上げた。さらに御記録二巻と御次第一帖を進上した。差し上げたのは、伏見院正和二年十月十七日御出家事、後伏見院御記、後深草院御出家、正応御記一巻などである。伏見上皇のご出家は伏見殿の九体堂で行われた。その出家の儀式の詳しい配置図などがある。後伏見上皇直筆の正本だけは急いで写し留めてから進上した。二日、晴。夜に惣得庵主や明元らが来て、大きな酒甕である酒海を用意してくれた。夜陰に思いがけないことで、楽しかった。酒宴には重有・長資朝臣らも参加した。

いつものように等持寺法華八講が今日から始まった。

#### 文永・正応・正和の院御素懐之記

三日、晴。島田定直六条庁官が院御素懐之記（※）をお借りしたいと言ってきた。それで文永・正応・正和年間などの記録を選び取り、貸してやった。恐れ多いことですと言っていた。そのお礼であろうか、酒樽や美味いものなどを献上してきた。神妙なことである。

順番で御粥を炊く会、いつものように当番幹事の上臈が準備してくれた。

※「院御素懐之記」…素懐は出家を意味するので、十一月一日に出てくる



上皇の出家記録と同様のものであろう。

四日、晴れていたが、夕方に雨が降った。南の庭に透垣すゐがきを立てた。

龍神、動く

五日、雨が降った。午前五時に大地震があった。近頃では大きな地震である。その後も小さな揺れがあった。龍神が動いたのでであろう。不吉な地震に驚いた。石清水八幡宮でも怪異があったそうだ。

先日は上杉家中の騒動で、全国的に戦争が起ころのではないかと噂が広まったようだ。

先だって石清水八幡宮の神人が牢屋からすべて出されたそうだ。しかし、その過半数は既に死んでいたらしい。この前の石清水八幡宮の騒動のことは、室町殿もきちんと認識なさっているそうだ。結局は、八幡宮を取り仕切っている西竹保清社務の指導に誤りがあったということだ。それで、社務を交替させるご決定がなされるようだ。ただし後任はまだ未定らしい。自分たちが無罪であることを神人たちはよく幕府に申し開きしたようだ。

順番で薪を焼く会、いつものように当番の東御方が準備して下さった。

浄金剛院看坊の理観が殺害される

八日、晴。浄金剛院の僧から連絡があった。理観が去る六日、寺の門前で殺害されたという。誰の仕業なのかは分からない。ただ理観に妻を奪われた男（※）の仕業らしい。言葉に言い表せないほど、とてもかわいそうなことだ。椎野の後任住職がまだ任命されていないので、理観を浄金剛院の留守居の僧（※）にして、当面、寺を運営させるように、こちらからも正親町三条公雅大納言からも申し付けていた。

ところが理観が寺を取り仕切っていると、他の僧たちとうまく行っていなかったらしい。もしかしたら、理観とうまく行っていない僧たちが結託して理観を殺害したのかもしれない。不審なことだ。

理観は心構えが穏便な人であったので、ことさらかわいそうなことである。正親町三条大納言が浄金剛院を内々に取り計らっているのだから、彼から厳しく真相の究明がなされるであろう。

※「妻を奪われた男」…底本では「妻敵」（めがたき）とある。

※「留守居の僧」…底本では「看坊」とある。

貞成母の命日の法事

十日、晴。いつものように身を浄めた。亡き母の命日なので、塔頭・大通院で型通りの法事をした。

十一日、晴。田向前参議が田舎の山城国大野荘から戻ってきた。数日間、大野荘に滞在していた。特別なこともなく無事に戻ってこられて、めでたいことだ。

十二日、晴。いつものように風呂に入った。田向前参議が大野荘のお土産を持参して来た。酒宴をした。

法安寺薬師如来でお百度を踏む

十三日、晴れていたが、夜に雨が降り出した。御香宮にお参りした。次に法安寺薬師如来に参詣した。願い事があったので、お百度参りをした（※）。扇一本を薬師如来に奉納した。住職のお部屋で少し酒を飲んだ。重有・長資朝臣らも一緒だった。

御所侍三木善国の息子が元服した

ところで御所侍三木善国の息子が成人式を行ったそうだ。この子は善国の養子で、もとは小川禅啓の息子であった。この子が御所へ挨拶に来た。一献の酒少々を持参して来た。それで祝い酒を飲んだ。田向前参議らも一緒に飲んだ。

※「お百度参りをした」…底本では「御百度せしむ」とある。自敬表現と解した。応永三十一年九月二十九日条の註記を参照のこと。

十四日、大雨が降ったが、夕方には晴れた。安楽光院長老が歳暮の挨拶に来た。対面して少し雑談した。それですぐに帰った。

夜、いつものように当番の田向前参議が薪を焼く会の準備をした。  
ところで室町殿は今日、伊勢神宮参拝に出かけたそう。

### 田向家青侍の亀丸が元服した

十五日、雨が降った。田向家の侍である亀丸が成人したそう。それで初めて一献の酒を献上してきた。思いがけず神妙なことである。この新成人と対面した。田向前参議は既にひどく酔っていたが、宮家でも祝宴の用意をしてくれた。

十六日、晴。豊原郷秋が来たので、音楽会をした。桃李花二帖・喜春楽序・喜春楽破・河南浦・平蛮楽を演奏した。次に盤渉調の採桑老・蘇合三帖・蘇合三帖急・白柱・輪台・青海波・千秋楽を演奏した。

長資朝臣が太鼓を打った。慶寿丸は盤渉調の時、少々琵琶を弾いた。音楽会が終わって、郷秋に酒を飲ませた。そして京へ帰っていった。

十七日、晴。重有朝臣が京へ出かけた。今夜、上皇御所で御音楽会があるそう。

十八日、晴。重有朝臣が帰ってきて、世間話を語った。上皇様のご出家は来年二月に延期となったそう。年内に出家するお気持ちでいらしたが、室町殿が年末の折節にご出家なさるのは不都合だといって、お引き留めなさったという。

### 慶寿丸の琵琶修行が後小松上皇の耳に入る

ところで慶寿丸が琵琶を練習していることが、上皇様のお耳に入ったそう。それで上皇様が冷泉永基朝臣にこのことをお尋ねになったので、「型通り宮様が指導しています」と永基は申し入れたという。「それはもつとも当然なことである。良いことだ」と上皇様のお言葉があったそう。

### 慶寿丸は雅楽に数寄なし

このように慶寿丸のことが上皇様のお耳に達した。それでいよいよ稽古に励むべきところなのだが、慶寿丸は全く音楽を好きにならず、曲の

暗譜も全く不十分のまま。音楽の才能は問題ないが、今のままだとでもではないが、ものになるまい。なまじっか良い噂があっても、実質が伴わなければ、本人としても、また師匠としても無益なことだ。

特に師匠の身としてはどうしようもないことだ。練習するように指導しても、まったく聞き入れない。最後まで琵琶を弾き通せるか、見通しが立たない。今日は林歌を習わせた。

十九日、晴。九月九日重陽の節供から琵琶と和歌を百日間、稽古している。今日がその稽古の最終日である。琵琶と和歌の練習も無事終わった。

二十日、晴。円光院主が酒樽などを献上してきた。円光院主は、「年末のご挨拶に参上すべきですが、時間がなくて」ということだった。この酒樽を玄忠が持参してきて、酒宴の準備をしてくれた。

夕方、塔頭・大通院へ行き、焼香してきた。東御方・廊御方も一緒にお参りした。田向前参議からも付いてきた。

聞くところによると、今夜、内侍所御神楽が行われたそう。綾小路信俊前参議も「御神楽に参列しました」と言っていた。

二十一日、粉雪が舞い降りていた。陰陽師の賀茂在方卿が新しい暦や八卦占いの本などを献上してきた。薪を焼く会、いつものように当番の重有朝臣が準備した。

### 本年最後の月次連歌会

二十三日、晴。毎月恒例の連歌会、田向前参議が当番幹事として準備してくれた。会衆はいつもの面々である。また長資朝臣が薪を焼く会の準備をした。それで一献の酒宴が度重なった。そのため、宮家の女性たちも連歌会の座に同席していた。そのままこの面々で深夜に及び百韻を詠み終わった。今年は一ヶ月も欠けることなく連歌会を続けた。無事に最終回を迎えることができて、めでたい。

このところ、上皇御所でも御連歌会が盛んだそう。天神様への奉納といい、連歌の愛好といい、いずれにしても徒然を慰めるには十分なこ

とだ。連歌を愛好するあまりのことである。

陰陽師の土御門有盛・同有清も新しい暦や八卦占いの本などを献上してきた。

今日は吉日なので、煤払いを始めた。

二十五日、晴。天王寺妙厳院から私の娘を来春二月にお迎えしたいと申し入れてきた。それにあわせてお茶三十袋も贈ってきた。思いがけないことで、嬉しかった。

娘のことは兼ねてから約束していることなので、何も問題はないと返答した。ただ来年では娘はまだ五歳、幼少なのでお寺に入れるのはいかなるものであろうか。

二十六日、晴。いつものように煤払いを終えた。祝宴をあげた。重有朝臣らも祝宴に参加した。

#### 後小松上皇・称光天皇に年末の礼状を送る

二十七日、晴。上皇様へ年末のお礼状を差し上げた。天皇陛下にも同じく慈光寺持経を通して差し上げた。天皇陛下に対しては今年になって初めて年末のお礼状を差し上げた。

祐誉僧都が来た。今年は正月の挨拶に来た以降、今までまったく宮家に来なかった。宮家にお仕えしない怠慢の至りであり、場合によっては不忠者と言ってもいいくらいだ。しかし亡くなった勝阿の奉公の功績に免じて、祐誉のすべての悪事を許してやった。祐誉が一献の酒少々を持参してきたので、会ってやった。少し酒を飲んで、帰っていった。

十二月の身の浄めとして、いつものように風呂に入った。

#### 入江殿御喝食の正月出立の御服

ところで、娘の入江殿御稚児の御服三着を見せてもらった。紅で紅梅を染めた綾の袷あむせだった。初めてのお正月出立なので、特に見せてくれたそう。御みせびらかしたが、お心安いことで、めでたい。それにしても目を驚かすほどの衣装だった。すぐにお寺へお返しした。

今夜はいつものよう貢馬御覧があった。室町殿は勤修寺家に寄宿している小川宮のところに行かれたそう。

二十八日、晴。御香宮・若宮・権現の三社へお参りした。年末のお参りである。重有朝臣らを連れて行った。すぐに帰った。

綾小路信俊前参議が来た。年末の忙しい時期に来るとは、神妙なことだ。いつものように御酒宴を用意してくれた。一献の酒宴が終わって、すぐに帰っていった。

二十九日、晴。町経時朝臣・西大路隆富朝臣が来たので、対面した。少し酒を飲ませたら、帰っていった。

#### 貞成四女の髪置き

私の四女の髪置きの祝いをした。日時は陰陽師の賀茂在方が占って来ていた。長資朝臣が儀式の進行役をしてくれた。特に三献の祝宴をした。

三十日、晴れていたが、夜になって雨が降り出した。今日で暦も巻き尽くした。ただただ慌ただしい一年だった。いつものように大光明寺長老ら面々が年末の挨拶に来てくれた。

今夜の薪を焼く会に当番は私である。薪を焼きながら酒を飲んだ。田向前参議らも一緒に酒を飲んだ。薪を焼く会の当番も一巡して終わり、めでたいことだ。

いつものように除夜のお祝いをした。明くる春もめでたいことを願い、「すべての事がとても幸せだ」と予祝した。

一年中の宮家の雑事や世間のうわさ話などを大概記録した。後の者が見るのは問題がある。特に他家の者には見せてはならない。(続)

